

令和7年度モンゴル青少年派遣事業レポート

鳥取県立米子東高等学校2年 井高桜子

事前テーマ 現代モンゴルでの暮らしと伝統の共存



写真) モンゴルの伝統的な移動式住居、ゲル

私は2025年6月15日から19日にかけて、鳥取県とモンゴル中央県の友好関係に基づき実施されたモンゴル青少年派遣事業に参加した。滞在先は、モンゴル中央県のゾーンモト市および首都ウランバートルである。初日は飛行機の遅延によりJICA訪問が叶わなかったものの、日本語学級訪問、遊牧民の家庭訪問、ホームステイ、現地高校生との交流、モンゴル中央県官房長官への表敬訪問、ウランバートル市内の視察など、短期間ながら多様な活動を通じてモンゴル社会に触れる貴重な体験となった。

この派遣事業に応募した動機は、「モンゴル」という国に対する純粋な好奇心だった。もともと人々の営みに関心があり、小さな頃から日本の文化や世界の民族とその暮らし、文化に惹かれてきた。そんななかでモンゴルも実際に行ってみたい国のひとつだった。

高校1年生のときに2つのエッセイを読んだ。漫才コンビ・オードリーの若林正恭氏による一人旅エッセイ『表参道のセレブ犬とガバーニャ要塞の野良犬』には、モンゴル旅行の様子が描かれていた。また、お笑い芸人で漫画家の矢部太郎氏の『プレゼントでできている』

には、テレビ番組の企画でモンゴル人の家族と共に生活した経験が描かれていた。どちらのエッセイからも、日本での生活では決して得られなかったものを得られたことが伺えた。こうしたエッセイによりモンゴルに行きたいという気持ちが強まった。

そして、世界の同世代の人たちがどのように生活しているのか気になっており、純粋に同世代の仲間として出会い、友達になってみたかった私にとってこの研修は絶好のチャンスだった。

中学生のときに地理の授業で、乾燥帯ステップ気候に属するモンゴルの伝統的な生活様式を学んだ。日本で日常生活を過ごしていて、モンゴルの情報はほぼ入ってこない。私は、モンゴルは伝統が残りつつも経済成長の最中にあるという予想を立てた。その予想のもと、都市化が進みつつも、遊牧文化を色濃く残す社会の姿、今しか見られないモンゴルの「今」を見たいと思った。

また、私は将来的に文化人類学の道に進みたいと考えており、今回の研修をフィールドワークの初体験と位置づけ、「現代モンゴルでの暮らしと伝統の共存」というテーマを設定した。近年、都市化が急速に進むモンゴルでは、伝統的な遊牧文化と近代的な生活様式がどのように共存し、また変容しているのかを自分の目で確かめたいと考えた。

ウランバートルでは高層ビルや交通渋滞が目立ち、近代的なライフスタイルが浸透している。想像以上に発展していた。都市生活が根付く一方で、郊外に出ると終わりを感じさせない草原が広がっており、遊牧生活が営まれていた。多くの人に遊牧生活の経験があるという話を聞き、モンゴルでは都市生活と遊牧の記憶が共存していることを実感した。

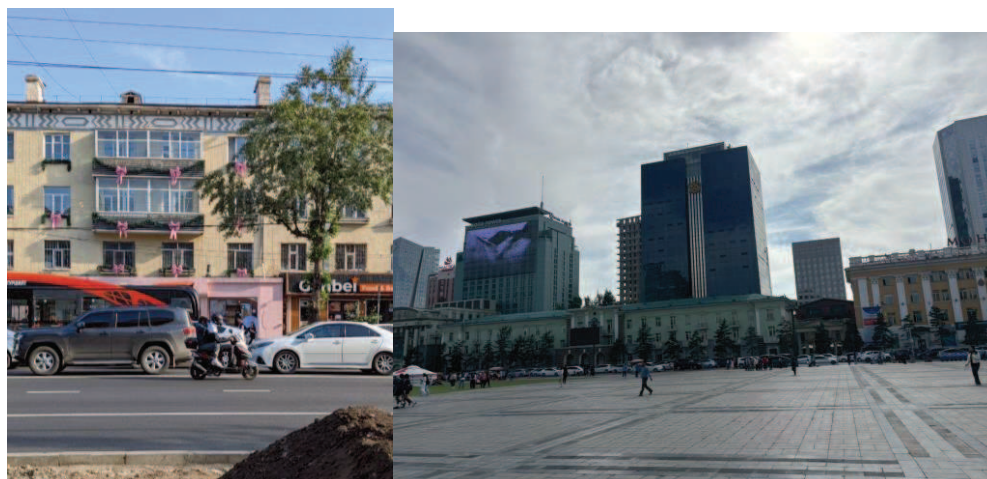


写真) 発展するウランバートル市内

実際、私が出会った高校生の中には「冬は集合住宅、夏はゲルで遊牧生活」といったハイブリッドな暮らしをしている人もいた。ある区間のなかに家が建ち、庭にゲルがあるという光景もみられた。また、私のホストシスターの家族も、それまで一年中ゲルで暮らしていたが、この夏に定住用の家を建てたという。こうした「定住」と「移動」、「近代」と「伝統」

の併存状態は、モンゴル社会の現在を象徴する非常に興味深い文化的構造であり、今後の変化の行方にも強く関心を持った。

フムーン総合学校を訪問した際には、馬頭琴の演奏や伝統舞踊の披露、モンゴル文字の指導を受け、こちらからは仮名や漢字を紹介した。こうした文化交流を通して、モンゴルの高校生が自国の伝統に誇りを持ち、先代から我々若者世代まで伝統が継承されていることに深く感銘を受けた。



写真) フムーン総合学校での記念の1枚 馬頭琴体験

遊牧民訪問では、伝統的なゲルのなかで、乳製品を中心とした食文化を体験した。モンゴルでは夏に乳製品（「白い食べ物」）、冬に肉類（「赤い食べ物」）を食すという季節ごとの食文化がある。ミルクティー（スーテーツアイ）は甘くなく、しょっぱい味わいで、日本の味覚とは異なる風味に驚いた。ミルクティー（スーテーツアイ）は砂糖が入っておらず、乳の成分が日本よりも濃いためしょっぱく、初めての味に耳の奥がキュッとなった。アーロールは乾燥チーズで、味が濃く硬かった。これはおやつ定番だそうだ。また、常温で温まった牛乳が湯葉のように層になっている、バターの原料をパンにつけて頂いた。どれも人生で初めての味で、「食」という生きることに欠かせないものの違いから、民族や日常生活の違いを感じ、異国にいるのだということをはっきりと実感した瞬間だった。



写真) ゲルの内部。上からバターの原料、プロテイン (左)、アーロール (右) と干す様子

今回の研修の中で、最も心に残っているのは、ホームステイ先で出会ったホストシスターとの交流である。彼女は私より2歳年下で、放課後には日本語学級に通い、日本の高校生活やアニメ、漫画に関心を持っていた。わずか一日という短い時間ではあったが、私たちの間には深い絆が生まれ、忘れられない思い出となった。

彼女の家族は郊外のゲルで暮らしているが、今回私は研修の拠点に近い、彼女の親戚のマンションにホームステイすることとなった。到着すると、まず彼女の従兄弟が、遊牧民訪問の際にも体験したアーロールとミルクティー (スーテーツァイ) で迎えてくれた。

その後、彼女と地元のスーパーへ出かけた。そこにはモンゴル製品に加え、ロシア・中国・韓国、さらには日本の商品も並んでいた。野菜や果物も豊富に見られ、輸入品かと思われた。モンゴルには元来、野菜や果物を食べる文化はあまりなかったと聞くが、近年では都市部を中心に、食生活にも変化が見られるようだ。彼女自身も果物が好きだと話していた。

スーパーでは、岩塩やミルクティーのティーバッグ、地元のビスケットなどを一緒に選び、お土産として購入した。買い物のおあとは、彼女にサジー味のアイスバーをごちそうになり、町を散策した。

夕食後、私たちが同じ映画が好きだという話題でさらに盛り上がった。スタジオジブリの『コクリコ坂から』が共通の好きな作品で、私のセーラー服がヒロインの制服に似ているという話になった。彼女に私のセーラー服を着せることを提案すると、本当に嬉しそうだった。そのまま一緒に夜の散歩に出かけ、セーラー服を着た彼女とラフな格好の私を見て「日本人とモンゴル人が逆みたいだね」と笑い合った。

夜にはスナック菓子をつまみながら、将来の夢や恋愛について語り合った。恋愛観が驚くほど似ていて、思わず笑ってしまうほどだった。お互いに化粧をし合い、夜更かしした時間も、忘れられない宝物だ。

このホームステイでは、不思議とホームシックを感じる事がなく、まるで日本で友達とお泊まり会をしているかのようにリラックスして過ごすことができた。彼女はただの友達ではなく「親友」、いや、ずっと前から知っていたかのような「ソウルメイト」のようだと感じている。帰国後も、私たちは SNS を通じて頻繁に連絡を取り合っている。

また、現地中高生との交流を通して、育った環境が異なっても、同世代としての悩みや関心に共通点が多いことを実感した。文化や制度の違いに目を向けると同時に、人間としての普遍性を見出せた。こうした出会いこそが、真の意味での国際理解、そして平和の礎となるのだと実感した。

モンゴル語の発音は日本語と異なり、はじめは音を聞き取るのも難しかったが、次第にわかるようになり、嬉しかった。モンゴルに行ったことで、外国語を学ぶはじめの段階、ゼロから1になる新鮮な感覚を久しぶりに得ることができました。私は、外国語を学ぶということは、その国の文化に敬意を持ち、その国の人に寄り添おうとすることだと考えている。モンゴルの若者が自らの文化に誇りを持ち継承している姿は、日本の高校生である私にとって、自国文化との向き合い方を見つめ直す契機となった。

この研修を通じて私は、「自国文化を深く知ることが、他文化理解の前提である」という文化人類学の基本に立ち返った。異文化を尊重するためには、まず自分がどのような文化の中で育ち、どのような価値観を持っているかを理解していなければならない。そのためには、広い視野と知的好奇心、そして柔軟な感受性が不可欠である。お互いに敬意を持って自分の母語や文化を教え合い、歩み寄った時間は、とても平和で幸せだった。

今回の滞在期間は短く、私が見たモンゴルはその一側面にすぎない。だが、それでも確かに「今のモンゴル」の一端に触れることができた。この経験をもとに、日本の文化についても理解を深めつつ、モンゴル語や歴史、文化への学びを続けたい。そして、できれば今度はモンゴルで1年を過ごし、厳しい冬や慣れない食文化も含めて、生活を通してこの社会をもっと深く理解したいと考えている。

本研修は、文化人類学を志す私にとって、フィールドワークの原点である。異なる文化や価値観の橋渡し役として、人と人との間にある違いを越えて、共感と対話を育む存在を目指していきたい。多くの方の支えと機会に感謝しつつ、今回の出会いと学びを、これからの学問と人生、そしてよりよい世界に向けて確実に活かしていきたい。